

「入らっシャル」などの「〜シャル」(「サッシャル」)

敬語法について

藤原 與 一

国語生活の実際について、大局的な標準を樹立するために、一々の事項について、まずその歴史的な現実を明らかにする必要がある。そこに見きわめられる、そのことの発展的動向が、将来にわたるべき「標準」を、適切に考えしめるであらう。

その歴史的現実とは、いわゆる国語史の研究によって明らかにされるはずであり、一方、国の諸方言状態についての統合的な研究によって明らかにされるはずである。二つの研究は相伴なう。

われわれの国語生活において、いわゆる敬語をどうしていくべきかは、今日の一重要問題である。人々はこの理想的な標準を望んでいる。日本語の生活として、敬語をどうすれば、すぐれた国語生活を実現していくことができるか。これの解決のためには、やはりまず敬語生活の現状を明らかにしていくことが肝要である。

つぎには、敬語法の中の一例「入らっシャル」などの「シャル」の言いかた(ついでには「サッシャル」)をとりあげてみよう。

文献による国語史研究では、「シャル・サッシャル」は、近古の「せらるる・させらるる」に出たと見られてゐる。「るる・らるる」に「せ・させ」の加えられた「せらるる・させらるる」は、ロドリゲスの観察記録によると、「口語に使用し最上の敬意を示す。」(土井忠生博士「吉利支丹語学の研究」)とある。これは、高い尊敬法のことばとして、今日の「せらるる・させらるる」に及んでゐる。さて一方では、「せらるる・させらるる」は、「シャルル・サシャルル」をへて「シャル・サッシャル」になった。

今日、世上には、文章語または文章語風のあらたまつたことばづかいとして、「せられる・させられる」の言いかたがいくらかおこなわれており、同時に、口頭語として、「シャル・サッシャル」またはこれからの派生形のいろいろなもの

が、およそ全国にわたって散在している。われわれはここに、「せらるる・させらるる」ことばの史的推移の結果としての体系的事実を見ることが出来る。

二

九州地方では、薩隅以南に「シャル・サッシャル」がおよそ見られないのが注目をひく。

「ハルカッシャイ。」（針を貸しなさい。）などと言っているのは、つぎに言う「ヤル」ことばの命令形「ヤイ」がついたものであろう。

薩隅から肥後南部・日向南方にかけての地域では、旧来の「レル・ラレル」敬語法がまだかなり見いだされ、かつ、「お……ある」の言いかたの「ある」にもとずく「ヤル」の言いかたがさかんである。これら、その他のさかんな中においては、「せ（させ）・られる」の言いかたは、発展しないうるできたのか。

右の地方を除き、肥後以北の西がわ九州では、「せ（させ）・られる」の複合ができて、「シャル・サッシャル」がおこなわれており、さらにこれは他の形にも進化している。

○イコアンジャン。

さようなら。「あさつことば」

は肥前五島のことばである。壹岐島でも、

○ヒトシナミ シチヨカッシャレニヤ タイ。

兄弟は同等にしておかれなくてはね。

○アメン フリョラッシャル。

「雨が降っている。」の敬態

のように言う。北九州筑前地方では、「シャル」がよく聞かれる。

○ウチノ オヂーシャンニ、アワッシャレンヤツタ。

うちのおじいさんにお会いになりませんでした？

○コレ! チョット タベテガッシャイ。

これをちよつとたべてごらんなさい。

などと言う。

さて、筑後を中心区として、肥後から肥前にかけての地域では、「シャル・サッシャル」が、さらに「ス・ラス・サス」というような形にも進化している。肥後五箇ノ荘のことばから見れば、

○センセイノ コラシッタ。

先生がいらした。

というようなのがある。

○センセイノ 行カシッタ。

とも言う。「行カシッタ」に対して、「シッ」の終止形

「ス」の出る言いかた、

○アシタ マチー イカス カイ。

あす町へお行きになる？

がある。ここで東京語の「いらっしやる」を考えてみるの

に、「しらっシヤッタ」は「しらっシタ」とも「しらシッタ」ともなつてゐる。これにくらべる時、右の「行かシッタ」は、同じく、「シヤッタ」からきたものと解することができよう。「行かシッタ」に対する「行かス」は、「行かッシヤル」に当たる。ここにわれわれは、「シヤル」ことばのおもしろい転化を見ることができるのである。

天草のことばに、

○オラス カ オラッサン カ。

しらっシヤルからしらっシヤらなすか。

とつうがある。平戸島農家の例では、

○ダリモ オラッサンヂヤッタロ ガ。

だれもしらっシヤらなかつただらう?

とつうがある。この「居ラッサン」は、「居らっシヤラン」のつづまつたものであらう。用語の気分も、「シヤル」ことばのそれなのである。この看取しやすいつ転訛例からしても、「シヤッ」「シヤル」の、「シ」→「ス」になつたことが推察されよう。

さきの「コラシッタ」では、「シヤッタ」とみとめられる「シッタ」を除くと、「コラ」が残る。「コラ」は、「見」の「見らん」のように、やはり、四段活用動詞未然形に類化されてできたものではないか。「来ラシタ」「行カシタ」のような「シタ」の言ひかたは、肥筑(後)の諸地方にちぢるしくおこなわれている。たしかに、五箇ノ庄例のような「シッ

た」が「シた」となつたものであらう。こうして、「シヤル」ことばが「シ」や「ス」になつてゐるのがみとめられる。

右は、つぎのような用語感情からも立証されよう。たとへば熊本市中では、人の来たことを言うのに、

「来ナハッタ」は一ばんよ言ひかた。そのつぎが「コラシタ」。「キタ」は普通で、「コラシタ」はよ言ひかた。

などである。「ナハル」は「なさる」である。「なさる」ことばを尊敬法の最上位におくことは全国的な傾向であり、「シヤル・サツシヤル」ことばはまた、国内一般に、通常は、かなりくだけたもの言ひとされている。あらたまつた時は「なさる」ことばを使い、「シヤル」などは、あらたまらない時につかうことが多い。これからすると、右の「コラシタ」のあつかひかたは、ちよよど、「シヤル」などの存立する位相をふんだ弁別になつてゐる。なお一つ、筑後方面の用語感情にふれてみよう。八女郡下での調査経験によれば、「居りナハル」が最上の言ひかたで、つぎが「おらっシヤル」、そのつぎが「おラス」とのことであつた。「シヤル」ことばの把持のしかたは、前述のところに応じてゐよう。その「おらっシヤル」についで、しかも、普通度の言ひかた「おる」の上位に、「おラス」を把持してゐる。この弁別の気分は、「シヤル」と「ス」との密接さをよく語つてゐよう。

「シャル」に対して「ス」が成り立って、人はこの両者に、何ほどの差別を感じとるようにならざるを得ない。その上下関係のつけかたは、人によってちがうこともあるようであるが、二つのものの密接な関係は、人々にすぐ思われがちのようである。

さて、やはり肥筑の全般に、

○コノゴロツ ドーシトラス、ナ。

このころはどんなにしてらっしゃる？

とか、「言ヨーラシタ」「行キヨーラス」とかの言いかたが、「行カス」などととも、よくおこなわれている。「ドーシトラス」は、「ドーシトル」……してあるの「しておら」に「ス」がついたものである。「行キヨーラス」は「行きヨール」（行きおる）の未然形「行きおら」に「ス」がついたものである。すると、これらは、「行く」の未然形「行か」に「ス」がついたのと同じことになる。まさにそうである。「言ヨーラシタ」も、もともと「言ヨーラシタッタ」であったと考えられる。ところでこうした「…ラス」の類は、音感上、人に、「ラス」一体のことばとしてうけとられやすい。が、ものはやはり「ス」をとりたてるべきものであることは、右に明らかであろう。ともあれ、「ラス」のおこなわれることはさかんである。

さらに、「サッシャル」の転化形として、「サス」がとりあげられる。肥前の西北で聞いたのでは、「先生が見えらシ

た。「見えラス」とともに、「見えサス」も言うとのことであった。「サス」が「ラス」と同等にあつかわれていた。これは肥前にかぎらないことのようなのである。「サス」は「ス」とあい伴なう。「ス」は四段動詞類に、「サス」はそれ以外の動詞に接続する。「ス」が「シャル」相当のものである時、「サス」は「サッシャル」相当のものとしてうけとられる。唐律城外ことばの、

○ソヤ ドヤン サシタッテス カ。

それはどんなにおしでしたか。

の「サシタ」は「サッシャル」であろう。

以上の「ス」(ラス)・サス」は、「シャル・サッシャル」の終止形がいきなり「ス・サス」になったのではなくて、「シヤッタ」「サッシャル」が「シタ」「サシタ」となることが先におこり、この「シ」「サシ」という新しい連用形が、四段動詞一般の活用形式からの影響で、終止形「ス・サス」を産むことになったのではなからうか。一つのすじ道として、これが考えられる。

「シャル・サッシャル」の中に「ス(ラス)・サス」ができると、これは新しい勢で発展して行ったらしく、今日肥筑では「ス」「ラス」などが、当地方の方言生活の一特色になっている。方言人は、これに、従来の「シャル・サッシャル」に感じたのとはちがった感じを持つようになっていく。微妙な分化である。音相が改まれば、その新しいものに応じて、その

ことばの表現的価値が生まれてくるのであらう。ここには、待遇表現法の生活の、新しい展開が見られるしだいである。

推移の前後関係を感じて、そこに訛りの意識を保有している人たち——たとえば平戸や筑後柳河のいわゆる家中弁の人たち——は、「ス(ラス)・ズス」を、百姓同士のことばなどと批評して、見下している。「来よらッシャル」などの方が上等の言いかたであるというのである。「入らッシャル」というのも、当今の東京語からの入来とは別個に、「上品な家中ことば」として持っているのである。

新しく「ス」「ラス」などが独自性をかち得たのは、いわゆる拗音の聞こえをすてさったからではないか。そのところに現代的な音感覚の満足をおぼえる人が、「行かシタ」は「行かッシャル」よりもよい言いかたなどと言うのであらう。

北九州、筑前の地方では、「ラス」はあまりおこなわれなうか。「シャル」が目立っている。つづいて、東がわ九州が問題になる。こちらにも、「シャル・サッシャル」は、いくらかずつおこなわれている。日向にもあって、その中部では、

○マー アガラッシャル。

まあお上がり。

は目下用で、その上の言いかたは、「マー アガンナハリ。」だとのことであった。日向では、西の山地部などに、「先生が こらシタ。」「ドゲ サシタッチャロカ。」(ど

うされたらうか。)のような言いかたもしているらしい。豊後地方では、「シャル・サッシャル」があるとはいへ、さかんとも思われぬ。それでいて、「シャル」に「ます」のついた「シャリマス」の末流「シャンス」からの派生形とされる「ンス」などは、九州の他地方にはほとんど見えぬのに、ここにはいくらか見えている。

三

中国地方になると、山陰に「シャル・サッシャル」ことばがさかんであって、「シャンス・サッシャンス」もおこなわれている。「しかし、「ンス・サンス」はおこなわれていない。」それが、山陽がわとなると、「シャル・サッシャル」のおこなわれることがはるかに少なくて、「シャンス・サッシャンス」はなう。ところで、「シャンス・サッシャンス」からの派生形、「ンス・サンス」はいくらか見られるありさまである。

山陰では、出雲隠岐地方が、「シャル・サッシャル」を、日常もつとも普通につかっている。その点では、ここは、全国でも代表的な所と見られる。

○コッチー ゴザッシャル。

こっちへおいでなう。

などと、この命令形が頻用されるおもむきは、まさに、「れる・られる」敬語の命令表現法が山陽岡山山下にさかんなのと好一对である。

註 拙稿「行かレル・来ラレルなどのレル・ラレル敬語について」

(文学二十七年十二月)

子どもも大人に、

○オマイサン ドコイ イカッシャ、カネ。

あなたはどこへお行きですか？

などと言う。「シャル」のラ行音は不明瞭に発音される。

石見から伯耆にかけての「シャル・サッシャル」の生活には、また、「シャル」√「サル」「セル」のような転訛も見られ、「見サッシャイ」が「見ハッシャイ」ともなっている。

○オマイ スス タベハッシャン カ。

あなたはすしを「たべさっしゃらん」か。

は山間部の一例である。「サル」「セル」の類ともなれば、その品位はさがる。広戸惇氏の「山陰方言の研究」によれば、「行カッシタ」「イカシタ」「イカッス」、「映画ヲ見サシタカノ。」のような言いかたが見られるが、これも、行カッシタ」は「行かっシャッタ」の転、「見サシタ」は見サッシャッタ」の転ではなかるるか。広戸氏がこれらについて、「隠岐では、かなり敬意を含んでいる。出雲、西伯、安濃、邇摩にもこの言い方があるが、さして敬意があるとは云えない。却って軽蔑的な気分すら持っている。」と説いていられるのは、あたかも、「シャル・サッシャル」ことばの転化したもののおこなわれかたを示していられるようで、含蓄が深い。筆者がかつて通信調査によって隠岐の諸地点から得

たものにも、朝の挨拶「オキサシタカノ。」があった。山陰に、九州と同様の「シ」「サシ」というような転化形があるのは注目し得る。

出雲地方では、「シャル・サッシャル」類一切の言いかたの上に、いっそうよい言いかたとして、

○ミヤス ナリナハッタゲナ。

安産しなされたそうな。

のように、「ナハル」ことばがおこなわれている。土地の人にも、「ナハイの方がいっそう丁寧である。」と言う。「ナハル」がよそ行き用でもあって上位のことばであれば、「シャル・サッシャル」類は、ふだんの敬語でもある。親しみをもって、家庭的にも表出するのがこれである。その形のくずれるのととも、品位の低い効果をかかすことにもなっているのである。一方、「シャンス・サッシャンス」となれば、ものはおのずからよくなる。

山陽では、安芸地方に、やや多くこれが見いだされようか。そのすなおな用法は、

○先生ノ 言ワッシャルのには 云々。

のようなものであり、多くは老人層の（または老人じみた）ことばになっている。

○ヨ一 フラッシャリマス コトデ コザイマス。

ほんとにまあ、よくおうるいのあることでございます。

など、天候・天体に關しては、すなおな敬意表現の「シャル・サッシャル」をつかうのが通例となっている。「これは九州にも内海島嶼にも見られることである。」若い人たちは、ほとんど男子にかぎって、諧謔や軽侮の下卑た感情の時に、ことさららしく、「言わっシャッタ」などと、「シャル・サッシャル」をつかう。天体などに対しては老人たちが古来の神聖視の風をもつてすなおな「シャル・サッシャル」をつかい、若い人は、多少ともばかめた尊敬法としてこれをつかうのは、このことばのおもしろい衰退過程を示すものである。話し手と聞き手とが向きあってこれをつかうことはない。したがって、命令形のおこなわれることもない。「シャンス・サッシャンス」の形もまたおこなわれない。が、「言わんせ。」(おっしやよ。)など、「シャンス」の類は、すこし見えてゐる。「言わんせ。」が「言わいせ。」とも訛つてゐる。「ンセ」は老年の人につかつて上品、「イセ」はすこし上長である人につかひ、下品であるという。「言わっせ。」とあるのは、若い者同士のことはで、より下品とされるかのようにあるが、さてこれは、「言わんせ」からのものか、あるいは「言わっシャイ」からのものか。

山陽系の内海島嶼でも、「シャル・サッシャル」はまれに特別にしかおこなわれなくて、「シャンス・サッシャンス」もなく、「シャンス・サンス」がいくらかおこなわれてゐる、とさうような例がある。

四

四国は、全国状況の中で見て、「シャル・サッシャル」ことばをほとんどおこなっていない所としてよからうか。いくらかずつは、南予・阿波内・讃岐内などに見えるようであるが、大勢としては、まずこれが微弱である。

五

つづいて近畿を見るのに、この方も、京阪神を中心に見ての大勢としては、まず、「シャル・サッシャル」ことばがおこなわれてゐない。

ついで周辺を見るのに、その南部の紀州では、四国阿波山地部などの例とあい応ずるかのうちに、「シャル・サッシャル」のよわい存在をみせてゐる。北紀日高郡の例だと、
○ヤメサッシャル。

およしなさよ。

のようなものがある。多くは老人語らしく、若い人は、「ひねつて言う時、オダテルように、『ゴザラッシャル』などと言う。」と言つてゐた。南紀には、北紀以上に、「シャル」がとぼしのが。ただし「行かんシ」のようなのは見えてゐる。

紀州について南大和、十津川郷では、

○アガラッシャル。

おあがりよ。

○コッチエ　ゴザラツシャル。

こっちへおひでなさいよ。

などの言いかたがかつてあったそうである。別に新宮市で十津川人に聞いたところによれば、「マダ　ゴザレ　ヨ。」とともに、「マダ　マイラシヤレ　ヨ。」があったらしい。

つづいて三重県下が問題になる。その西南部、紀州分の海岸では、佐藤虎男君の調査によると、古江のことばに、

○モツテカッセ　サ。

とある。「持って行かっシャイ」の「行かっセ」か。別に、○シツカリ　シラベヤサンスツグド　ナ。

しつかりしらべなさいということだけだ。

とある。「……ヤサンス」は、サジャンス」の転「ヤジャンス」であろう。だとすれば、当地方に「ジャンス・サツジャンス」ことばがあることになる。実際そうなのであろう。このあたりに「食わンセ」などもある。

志摩半島でも、老翁が、

○コッチー　ハイラツシエ。

こっちへおひでなさいよ。

と言っていた。別の老人は、

○トング　ヘラサレ。

さあ、茶の間へすつと持はりなさいよ。

とか、「サーサー。スワサレ　スワサレ。」(さあ)。一歩くおつけなさい。(と)か言った。「シャル」「サレ」「シ

ヤレ」の「サイ」(ハ)ヨ　ヤスマサイ。(と)がある。

三重県北地方を佐藤君が調査したところによれば、「シャル・サツシャル」の「セル・サツセル」(マー　イッブク　サツセ。へ親しい間の丁寧な言いかた)があり、「サル」もある。その否定形は「知らサラん」である。連用形に、

○カイトリニ　イカシタンヤロ　カ　ナ。

具探りにいらしたのだらうかな。

など、「シャッタ」の「シタ」があるのが注目される。「行かシタ」とならんで「行かんた」もある。

○カンベー　イカイタモンデ　ネ。

神戸へいらしたもんでね。

などの「行かいた」も、「シ」の「イ」か。「シャル・サツシャル」も、転化形となったものは、また別の新しさも持つて、かなりおこなわれるらしい。

六

三重県の状態は、岐阜愛知両県下の状態につながっているようである。都竹通年雄氏は、「岐阜県愛知県の所々の方言で、尊敬すべきでも卑しめるべきでもない人に対して、行かッセル・行かッセルなどを使う。」(国語学第十二輯)と言っている。岐阜県の「郡上方言」では、「イキナレ」(「イカッセル」をあげて、「敬意の順」としては、後者が前者の次であることを示している。天野俊也氏は、郡上郡白

鳥町で、「敬語表現センセイカシコトサシタ。」〔使役の場合ハシコトサセタらし〕（高鷲村では「サッセル」を開かれた。岐阜県東、恵那郡の「福岡地方方言考」によれば、

○何処へ行かッセル（どこへ行きなされる）

○田ノ甫へ行かッせんか（行きませんか）

のようなが見え、「尊敬の意は低し。」とある。さらには、

○運んどらした（運んで居らした）

など、「らし」の実例が見えている。九州のと同じものである。飛騨高山市などでは、

○ドコンコノ ナニヤー コー イワツサル。

どこそこのだれさんは、こうおっしゃる。

のように言う。その、「アアアア。ヤスマツサイ エー。ナンカ ヨーシ カイ ナー。」（あゝゝ。おやすみよ。何か用事かね。）などと言うのを見ると、「シヤル」の命令形「サイ」の言いかたが、気がるな、わけへだてのない、低い敬意の表現法であることがよくわかる。

ついで信州にはいると、島崎藤村の「生ひ立ちの記」には、「ばゝさま、……。」一寸うしろを向うて見させれ。「とあり、荻原井泉水氏の「旅のまた旅」には、「浅間山」の条に、「浅岳ホテル休憩所かみさん」のことは、

○「あなた方、泊らすか」＃こゝは泊めなすのか＃」
や、泊らすなら泊めやす」

がある。「信州方言読本」語法篇には、「きさした」「こらした」「行かッシー」「行かッしえー」「くらッシー」などが出てゐる。

甲州の一例をあげると、

○マズイヨナラ、イマ イッペン キサツシヤイ。

まずいようなら、もう一ぺんおいでなさい。

がある。

三重につづいて愛知を見ると、尾張西部で、
○知らッシヤラなんだ。

とらうのを聞いた。「名古屋方言の語法」には、

○行カッセル（おいでになる）

○買ッテゴザラッセタ

の記事が見えている。

○ソー セスト オカッシヤイ。

そうしなすでお置きよ。

は知多半島南端の例である。これにつづいては、「おけー」よりも「おかッシヤイ」の方がちょっとよゝとのことであった。尾張に「おらした」（いらっしやった）の言いかたもある。

三河でも、その西部では、「見サツシヤッタ エー。」（らんになったらしい。）などと「シヤル・サツシヤル」ことばをおこなす「セル・サツセル」〔例「コレ買ッテ行カッセー。」〕「サル」〔「イッ帰ラッサル？」〕などの訛形もかなりさかんのようである。〔清瀬良一君の報告による。〕「行かッ

ル」はてしななことばだとする。なお

○アンタガ 買ウシタ ……。

のように、「シヤッタ」の「シタ」も見られる。三河東部の奥でも、

○ヤラッセル。

やりなさを。

「ヤメラッセル。」(やめなさを。)のような言いかたをする。渥美半島でも、「行かッシヤイ。」「きサツシヤイ。」を聞く。

「遠江方言の研究」には、

○スカッシャス (崇敬体の命令形)

と出ている。

「伊豆宇佐美方言」(「方言」二ノ七)によれば、「就寝前の挨拶」として、

○ヤスマッシャ。

がある。

「神奈川県中部等」に、「買物言葉」で、

○ケイヤッセイ。

があるという。(柳田先生「話題集〇買物言葉」民間伝承八

ノ三)

東京語でも、柳田先生のおことばによれば、もとは、「火ノ用心 サツシヤリマシヨ。」などと云って来たという。

七

近畿に返ってその北辺を見るのに、こちらは、南辺とはかわって、「シヤル・サツシヤル」ことばはあまり見られないようである。丹後路に、「行かシヤッタ」「行かシタ」などが、前はつかわれていたらしい。丹波奥にも、「食べとらんシタ」のようなものがある。しかし、丹後奥では「なざる」の「ナル」ことばがとよく、「シヤル」ことばを見せない。近世に上方のことばとしてさかんであった「シヤル・サツシヤル」が、今日近畿に上述のような分布を示しているのは注目し得る。

近畿を出はなれて、近畿系とも見られる方言地帯、越前から越中を見ると、この地帯には、「シヤル・サツシヤル」ことばがさかんであり、越中の状態は越後につづく。こうして注目される北陸道一帯は、西の山陰の、「シヤル・サツシヤル」のさかんな出雲隠岐地方と見合わされる。

○タベサツシヤイ ノー。

おたべよ、ね。

は越前海岸の例である。福井市東部の

○オマイ ドコイ 行カッシヤルイ ノー。

は、「どこい行くんや。」というような、軽親愛のことばで、敬意は非常に少という。越前東部山地には、「墨下書かシ。」(お書きなさい)「何々してクラシ。」(「くらっシヤイ」の転)のような言いかたがあり、北上して加賀の白

山麓方面に行く、

○ナンジゴロニ ッカッシャッタラ。

何時ごろにお着きだった?

のような言いかたがさかんである。

加賀能登にはいれば、「シャル」ことばは越前よりもさうさかんか。金沢市あたりでは、

○オマヤ、ドー サッシャッタ カ。

あなたはまあ、どうしなされたか。

のように言う。これは「普通よりもちよつとよい言いかた」とされている。これの上に位する言いかたに、

○コレ クーマッシャラン カ。

これを食べないさいませんか。

のような、「シャル」に「ます」の上接した言いかたがある。「ます」が下接して「シャンス」の生じたのはちがった、特異な現象である。「シャル」の単一性がはっきりとしてくると、これと「ます」とは自在にはたらかきあって、右のような契合をもとげるようになったのであらう。「マッシャイ」が転訛して、「マッセイ」「マッシ」となる。

加賀に「入らして」の形があり、能登でも「イラシタ」と言う。

○コッチー イラシマ。

こっちへいらっしゃいよ、まあ。

○ソー シェント オカーシ マー。

そうしないで「おかっしゃい」よ、まあ。

は能登輪島の命令表現である。能登東宇岸出津町では、「イタサシマ。」(よこさっしゃいまあ。)と言う。能登に「シャル」の「サル」(シャイ、サイ)もあり、「きとらサル」はよほど品が落ちてゐることばとのものである。

○ドコイ 行キマッシャル ネ。

○ドコイ 行カッシャル(行カッサル)。

○病気が ナオレエサッサラナング。

(「なおり得ることができなかった」)

は能登西側、富来郷のことばである。右の「行きマッシャル」について、「やゝ尊敬の意がある。長上に言う。格式がある。」との説明があった。「お茶を飲ンマッシ。」はお茶を「ついで出す」方のことばで、「飲まッシャレ。」は、かつてに飲んで飲めという時のことばだという。「マッシャイ」は、

○飲ンマッシー ネ。

と形をかえてもいる。「モット コッチ ヨリマッシエ。」など、「ませ」にまぎれるような「マッシャイ」もある。

能登になお、九州のと同じ「ラス」がある。能登西で、

「今日は。」の代りに、「オラッシャル カイ ネー。」(「年

より)とも、「イラス カイ ネー。」(「かるく言う時はこ

れ、多)とも、「オラス カイ ネー。」とも言う。「イラ

ス」「オラス」は若い人には少いという。町よりも、里の女

の人が、町へでも出てきた時に、よくこれを言うとのこと

あった。

○キータラス カネー。

聞いていらっしゃるかね。

の「ラス」には、敬語の意味がちよつとぶくまれているとのことでもあった。

越中にも「ラス」はあるか。「田ノ、ワリアイデ、モロー、トラスカラ、云々。」は一老女のことばである。当地方に、「シャル・サッシャル」はさかんである。「レル・ラレル」の敬語法とこれとが、ともによくおこなわれている。南部山村で、老夫婦は筆者に、

○サーサー。ハイラッシャイ。

と言ひ、ほかの場合に、くだけた気もちで、

○ダレモ オラッサラン。

○スズカニ サツサイ ヨ。

「しずかにさっしゃいよ。」(辞去の挨拶)

と言つてゐた。越中では、なお、

○コノゴザ アテテ イカッシャイ。

○ヤスンヂ イカッシ。

「風呂へ 行ッテラッシ(セ)。「[母→子・女]」などを聞く。

越後西部の一地では、「マー アガラッシャイ。」は「上がんナエイ。」(なさい)と同程度であるという。また、「シャイ」は年よりことばだとも説明された。この地に、

○モット マエー 出ヤッシャイ。

○チロット ハシゴ サッシャイ。

ちよつと箸をおかしなさい。

などともあった。出雲と同様の「ゴサッシャイ」が、土地人から、「およこしなさい」に当たると説明された。

○コッチー イクシテ クラッシャイ。

こっちへよこして下さい。

は中越方面の「くらッシャイ」である。「コッチー コラッシャイ(ゴザッシャイ)(コッシャイ)。」なども当越後にある。

○オマイノ オトーサン ドゲー イガシタ。

とも言ひ、「マダ イラシテ クダセー。」なども古来言うという。

佐渡に、「どうくしてクラシャマシエ。」(下さりませ)「アレ 見シャヤマセ。」、「クラセー」(くらッシャイ)などがあり、越後北部でも、「コレ 読ンデ クレッシャイ。」などと言う。新発田方面でも、「ござらしたか」などとも言つてゐる。

八

東北地方を一巡してみれば、越後北部につづいて山形県は、「シャル・サッシャル」ことばのよくおこなわれる所として注目される。山形市を中心とする村山地方については、齋

藤義七郎氏の御研究がくわしい。(「山形県村山方言助動詞考」方言研究第四輯)これには、「仕事サッシャエ」とともに、「仕事スラッシャエ」がある。村山地方の南の置賜地方では、一村の一老婆からは、「シャル・サッシャル」は聞けなかった。村山地方の北の最上地方では、

○オチャを アガラッシャーヤ。

のようなのを聞く。「シャイ」を「サイ」と言うことも多し。(コッチャゴザラッサイ。見る)の場合は「見らッシャイ」である。「見サッシャイ」と言わなすで、こう言うのが、国の東北方面について注意される。庄内地方については、「庄内語及語釈」には、

○今日の新聞見さしたが。

(今日ノ新聞見サシヤッタカ)

などである。酒田市では、「行かッシャル」などと、今日普通には言わぬという。

秋田県下では、「シャル・サッシャル」ことばはまれなものではないか。本荘町などでは、ずっと年とった人だけ、「コッチャ コラッシャイ。」と言うという。

陸奥の弘前ことばでは、「こらッシャイ」など、言っていないようである。津軽半島中部でも「シャル」は聞かなかった。東の野辺地では、

○マーマー。アガラシテ クダサマへ。

とか、「あるかサル」とかいうのを聞いた。下北半島にも、

○オメア スシ アガサル カニシ。
というようなのがある。陸奥東南部の調査では、「見らッシャイ」などは言わぬとあった。

岩手県には、わりと、「シャル」ことばが見られるようである。県北に、「行ガッシャイ」「サッシャイ」、「見らッセ」、「ケンヅバカリ ケラッシャイ。」(こればかりくださる。)などがある。県東南部の陸前分では、

○アツア 行ッテラッセ。

○ヤスマッセ。(晩の別辞)

○コッチェ キサッセ。

などと言ふ、「そまつなことば。それにしてもわりあいよいことば。」とのことである。「ケラッセア」(おくれよ)もあり、「セア」が「セン」ともなっている。「どうくしてケラッセン。」は「わりあいうちわのことば。肉親同士など言う。」とのことであった。

宮城県下では、仙北に、

○ユーベ ウヂサ コーチョセンセガ ゴザラシタ オ
ン。

ゆうべうちへ校長先生がいらしたのよ。

の言いかたがある。「シャル」のまゝのものは聞かれないか。仙台弁の

○あの人 オカワリ 有らサンメ ナー。

という「有らサン」は何であるるか。仙台市の一老婆からは、

○モノノ ワカル ヒトデ、ヨグ ココエ イラサッタ。

○アノジブンニ トツテ オカッサット (おかつシャルと) ヨカッタ ネ。

○ピンボニ ナラシテ ヨ。

貧乏になりなすってよ。

○テンノーヘイカ トーラサル 道に ……

などを聞いた。一般には「シャル・サッシャル」を言わないのに、この老人はこうであった。仙南警城分には、「行ガッシャイ」などがある。

福島県下、福島市の北・南の地方にも、老人に、「ゴサラ

ッシャッタ」などがある。会津弁では、

○ドゴイ 行ガッシャル。

○タベッセ。

おたべなささ。

などと言う。白河あたりで、

○ニシャー サキ クワシー。

おまえさんはさきにおたべ。

のように言うのは、「シャイ」の「シー」かどうか。「シー」は、気らくな、こたわるところのな言いかたになる。

菅野宏氏からは、県下の「見ラッセ」の類について、「家庭的農村的スタイル」との御教示をいただいた。

九

関東を見るのに、下野北部に「コッチサ キラッシ」。「ア ガラッシ」などがあり、「タベラッセ。」となったものもあり、常陸に「シャル」ことばがある。

上野内にも「シャイ」などがあるらしく、「埼玉方言の語法」(大久保忠国氏)にも、「ジラッシヤイ」、「取ラッセ ー見サッセー」、「起キヤッセ」、「シャンセ・ヤシャンセ」のようなが見える。

千葉県にはいと、房州に「シャル・サッシャル」ことばがさかんである。

○イツ キサッシツ (サシツ) タ カイ。

○イツ キサッシャンシタ。〔問〕

ついで伊豆七島の新島の、

○ヤスマネーデ ハイク イカッシエ。

休まないで早くお行き。

○オメーワ ドキー イカッシャウ イ。

あんたはどこへいらっしやる?

などがある。

十

以上、「シャル・サッシャル」ことばの諸相の、全国にわたるおこなわれかたを、統一的に見てきた。旨としては、「日本語方言」共時態を見まもって、「シャル・サッシャル」こ

とば現在の生活を、体系的にとらえようとしたものである。

かつては、これは、口ことばの全国共通語であり得たのではないか。しかし、文章語としては栄えなかつたようである。そこにこのことばの運命があつた。「シャル・サッシェル」の言いかたは、今日、総体に、退化の状態にある。

ただ一方で、東京語を中心に、「入らっシャル」というのが、今日の共通語として、さかんにおこなわれている。これ

は、新な勢で広まりつつもある。地方人は、自己旧来の「行かっシャル・来サッシェル」などを忘れて、共通語の「いらっしやる」を新しく都雅なものとしてうけとるようになつてゐる。言語心理のなりゆきには、じつにおもしろいものがあると思う。

(二九・七・二〇)

— 広島大学助教授 —